

学びの自律に向けた第一歩 — 創造的な思考力を働かせるための知識を構造化する活動を通して —

水谷 佳那子* 新山王 政和**

*春日井市立南城中学校

**創造科学系音楽教育講座

First Steps Toward Learning Autonomy — through activities that structure knowledge for creative thinking —

Kanako MIZUTANI*, and Masakazu SHINZANO**

*Minamishiro Junior High School, Kasugai 486-0852, Japan

**Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords：学びの自律 創造的な思考 知識の構造化

本報告書は、Ⅰ～Ⅲを実践者の水谷佳那子が執筆し、Ⅳを共同研究者の新山王政和が執筆している。

Ⅰ はじめに

義務教育修了とともに音楽を学ぶ機会を終える人は少なくない。生徒が豊かな想像力を働かせて音楽を捉えたり、表現したりする活動を通して、将来的に自分の力で生活や社会の中で新たな意味や価値を生み出していくことができるよう、3年生の音楽科の学習では「学びの自律」を目指していく必要があると考えた。

本校の3年生は、これまでの経験から音楽を感覚的に捉えたり、表現したりすることはできていたが、音楽的な見方・考え方を働かせて音楽を捉えたり、捉えたことを基に表現したりする能力が不足していた。要因として、音楽的な見方・考え方を働かせるために必要な知識が不足しているからであると考えた。そこで、感覚的に習得してきた音楽の知識・技能を整理させ、音楽の意味を自身の力で創造していく力を育むために、まずは音楽の意味や価値を捉える力を育みたいと考えた。本題材では、創造的な思考力を働かせるために

必要となる知識を構造化していく中で、音楽のよさや美しさを捉えさせていく。また「学びの自律」の実現に向けて、生徒が主体的に学ぶことができるように「学習の個性化」を実施していく。

Ⅱ 実践報告

1 実践で目指す生徒の姿

協働的な学びの中でメタ認知を働かせていくことを通して、新たな知識を生成し、構造化していく姿

2 実践計画

本題材では、現在91歳を迎えた映画音楽の巨匠ジョン・ウィリアムズが作曲した楽曲について、音楽のよさや美しさを自分なりの言葉でまとめさせていく。教材は「スターウォーズ」「インディ・ジョーンズ」「ハリーポッター」「ジョーズ」の4曲のメインテーマを用い、興味のある曲を生徒に選ばせる。生活の身近にある楽曲を取り扱い、実生活や実社会の中で音楽的な見方・考え方を働かせやすくすることで、生徒自身が自分の力で豊かな生活や社会を創造しやすくなるようにしていく。

3 実践考察

【活動1】音楽を形づくっている要素の働き

の基礎的な知識を習得する

音楽を形づくっている要素の働きとはどのようなものなのか、一斉授業で説明するだけでなく、作曲者の立場になって音楽の意図を明確にさせていくことで、音楽を形づくっている要素の働きに関する基礎的な知識を習得させた。また、知識習得の確認として、グループフォームで問題を解かせたが、平均点は7割程度であったことから、基礎的な知識はおおよそ習得することができたと考える。

【活動2】 自身が選択した楽曲を分析し、よさや美しさを自分なりの言葉でまとめる

生徒は、個人のタブレットを使って、自身が選択した楽曲の映像を何度も見返したり、同じ曲を選んだ人と確認し合ったりしながら、楽曲から捉えた形式や場面ごとの音楽の構造の変化をスライドにまとめた。【活動1】で得た知識を基に、協働的な活動や自分なりに言葉でまとめる活動を通して、知識を構造化することができたと考える。

【活動3】 同じ楽曲を選択した人と集まり、スライドの中間発表会を行う

中間発表会後にアドバイスを共有させた。友達からのアドバイス以上に、友達の発表を聞いて得た知識の方が多かったと答えた生徒が多かった。知識が未熟な段階では、メタ認知を働かせながら他者の発表を聞くことで、新たな知識を習得しやすいことが分かった。

【活動4】 完成スライドを用いて発表する

【活動3】で得た知識を基に、スライドを見直させ、発表会を実施した。生き生きとした表情で発表する生徒の姿が多く見られた。また振り返りでは、「日頃から感じ取っていたことを、音楽を形づくっている要素の働きごとに整理していくことで、音楽の面白さがより分かった」と記述していた。

Ⅲ 実践者によるまとめ

本実践を通して、生活の身近にある楽曲から音楽の構造を捉えさせていくことで、生徒

は楽しみながら知識を構造化することができたと考える。年度始めは、生徒が「音楽を形づくっている要素の働きって何？」と話していたが、本実践の次に行った合唱の授業では、生徒は自らが設定した思いを音楽表現で実現するために、音楽的な見方・考え方を働かせながら、主体的に音楽表現を追求していく姿がみられた。生徒の振り返りでは、「自分の表現の思いをもった上で、楽曲分析をしてみたら、作曲者の思いや意図が明確に見えてきて、音楽表現を試すのが楽しくなった」と記述した。まだ学びの文脈に合わせた学習を行っている段階ではあるが、「学びの自律」を実現することで、生徒が自ら実生活や実社会で音楽の意味や価値を創造できるようにしていきたい。

Ⅳ 共同研究者の所感（新山王執筆）

附属名古屋中学校で研究実践を積み重ねて得た所産を、一般校でも活用しようと試みた意欲的な取り組みである。本実践では、生徒一人一人に自分なりの「音楽の意味」を考えさせる方策として「身近な音楽」を教材として取り上げていた。類似の活動では、生活の中で直接耳にする機能音楽やミュージックサイン（合図や信号、時報、注意喚起）に注目したり、歌詞の内容や作曲者の生い立ち、社会情勢等にのみ依拠したりしてしまい、音や音楽そのものを抛り所とする分析的なアプローチへ至る活動は決して多くない。しかし本実践は、それらの音楽外の手掛かりに加えて音楽の要素も手掛かりにしながら音楽と向き合うという、貴重な経験を生徒へ提供していた。学年当初に音楽の要素を理解していなかった生徒が本実践後には約7割の理解率を得ていたことは、音楽と向き合う際の一つの方法として音楽の要素を根拠にしたり、思いや意図を具現化する際に音楽の要素を使いこなしたりできるようになった証左であろう。事実、その後の合唱活動では音楽的な視点から曲に向き合うことができていたと言う。